

武藏野日曜集会

# 世の光

## ——ヨハネ伝第8章 12～20節——

1994年12月4日

小池辰雄

聖書にきたれ 初めに靈言ござる 魂之靈の世界 靈の念は生命・平安 世の光 無者キリスト 何處より來り何處に往く 光の子 夢の世界

### 【ヨハネ8・12～20】

<sup>12</sup> 斯てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』<sup>13</sup> パリサイ人ら言う『なんじは己につきて証す、なんじの証は真ならず』<sup>14</sup> イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり、我は何處より來り何處に往くを知る故なり。汝らは我が何處より來り、何處に往くを知らず。<sup>15</sup> なんじらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。<sup>16</sup> されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕なるに因る。<sup>17</sup> また汝らの律法に、二人の証<sup>18</sup> は真なりと錄されたり。<sup>18</sup> 我みずから己につきて証をなし、我を遣し給いし父も我につきて証をなし給う』<sup>19</sup> ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』<sup>20</sup> イエス宮の内にて教えし時これら之事を賽錢函<sup>さいせんぱこ</sup>の傍らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。

### ●聖書にきたれ

私の母は失明してから、相対的な現実においては非常に悲惨な闇の世界でした。母が信仰に入る動機をつくったのは私ですけれども、もともと浄土真宗だつた。浄土真宗というものは、弥陀の本願という他力本願の宗教ですから、福音に非常に近いんです。

このあいだ、伊豆から帰つてくるとき、電車の中で若者どもが5、6人、大きな声で騒いでいた。大体、みな共同の電車の中で、あたり知らずに騒いでいるのはとんでもない。今の若者がそういう非常識なのは、日本は三等国だと言いたくなるくらいです。ドイツではそんなことは絶対にない。ドイツでもアメリカでもそうだと思います。やはりキリスト教の伝統がある国は違う。その点で無宗教の日本は精神的に一番ダメではないですか。今



の教育そのものがなつていない。先生方が魂の世界を本当の意味において持つていなか  
ら、日本というのは情けない。だから、我々、福音にある者はそういつた闇の世界に対し  
て本当の光をもつて戦つていかなければならない。我々自身が本当に光でなければなら  
いということを心から思わざるをえません。仏道でもキリスト道でもいい。とにかく、絶  
対的な世界を持たないというのが大方ですから、本当に情けない。どうぞ、あなた方は、  
いかなる人いでつくわすか知りませんが、

「聖書にきたれ」

と言つて、自由な伝道を、一対一の伝道をなさつてください。大体、普通の本屋では聖書  
を売つてないから、本当に情けない。我々の存在そのものが非常に伝道の使命を負つてい  
ますから、そういう自覚のもとに生きていかれるようにお願い致します。

### ●初めに言ひざひる

それではヨハネ伝8章の12節から入ります。

<sup>12</sup> 斯てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は

暗き中を歩まず、生命の光を得べし』

ヨハネ伝は非常に「光」という言葉が多い。パウロは「義」という言葉が多いけれども。

ヨハネ伝の最初の方に、

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」（ヨハネ1・1）

とある。この「ロゴス」というギリシャ語を「言」と日本語に訳してしまふと、おもしろ  
みがなくなつてしまふ。「ロゴス」というのは「語る、言う」という意味の「レゴー」とい  
う動詞からきている。昔は「言う」という言葉は、漢文では「道」を訓読みで「道う」と  
読んだ。だから、

「太初に道あり」

と訳してあるのも結構です。

「神さまの語らいがあつた」

ということです。

聖書は創世記から默示録まで、これは神の言です。言は、音におけるところの神さまの  
聖意の表現です。行いにおけるところの表現が神の業になる。表現の形態が言であるか業  
であるかということで、もともとは神意、神の御意なんです。神意のないところには言も  
業もない。言の元は神意、神の意です。初めに神の意が土台ですから、意が表現されて、  
言になつたり行いになつたりする。言は表現の一つの形なんだ。我々お互いも言葉によら  
なければ通じないわけです。

ところが、言葉が要らない世界がある。

「以心伝心」



という。心を以て心に伝えるという。何も言わなくて、心が通ずる。お互いに目と目と見合つて、何も言わなくても、その気持が通ずる。人を憎んでいると、嫌っているその目つきで分かる。愛すれば、愛する目つきで分かる。目つきといふものは妙なものだ。目といふものは不思議なものだ。うれしい目と悲しい目と怒っている目と疑っている目と、色々な目つきといふものがある。これは妙なものだ、目玉の構造は同じなんだけれども。

だから本当は、「初めに言あり」ではない。

「初めに意あり」

だ。根源には意がある。心の世界、靈の世界、魂の世界です。本当の言は靈言なんです。

靈の土台のない言葉は空しい。明治5、6年頃の訳に、

「初めに靈言ござる」

という訳がある。大したものだ。

「心は万物のもとであり、創造のもとである」

という仏教の坊さんの言葉もある。

### ●魂之靈の世界

要するに「魂之靈」の世界です。靈は「ひ」と読む。神さまから靈を受けることを受靈といふ。我々は聖靈を受ける。これが正に受靈なんです。十字架の贖いを信じて、その土台のもとに聖靈を受ける。聖靈のバプテスマとは受靈のことです。

「聖靈を受けるまではキリスト者でない」

とパウロがローマ書8章で言つているとおりです。十字架を本当に受けとらないと、本当の意味で、また聖靈が受けとれない。十字架と聖靈は離してはいかん。キリストはルカ伝12章で

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや」（ルカ12・49～50）

と言われた。「火」とは靈のことなんです。「受くべきバプテスマ」とは十字架のことです。

「十字架に架かつて贖罪をしたら、今度は、お前たちは祈つて待つていろ、聖

靈がくだるぞ」

と、ちゃんとキリストはそれを言つてらつしやる。十字架の土台に初めて聖靈がやつてくる。十字架をいい加減にした聖靈教なんかはダメです。また、十字架ばかり言つているのもダメ。十字架と聖靈は分けることができない関係にあります。

十字架に架かつたら、今度は復活のキリストが靈的な生命をくださる。「復活」という言葉は妙な言葉だ。復た息を吹きかえしたということではない。本当は靈活なんだ。キリストは靈に生きる。そうすると、今度は聖靈がくだつてくる。息を吹き返して復活したので



はない。次元の違つた凄い世界に入つて、それが現れる。御靈のキリストです。

### ●靈の念は生命・平安

ローマ書8章に、

「<sup>1</sup>この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらることなし。<sup>2</sup>キリスト・イエスに在る生命の御靈の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。<sup>3</sup>肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、旧約の律法を本当に守れば、そうすれば生きるのだけれども、それは誰も守れない。これが本当に実践できたのはキリストだけです。キリストは旧約の律法以上の世界を持つているから。

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。<sup>4</sup>これ肉に従わず、靈に従いて歩む我らの中に律法の義の完<sup>まつと</sup>うせられん為なり。

とはつきり書いてある。この「義」という言葉は「正義」と訳してはいかん。神の御意の世界を義という。

「神の義は福音のうちにあらわれた」

とはそのことです。

<sup>5</sup>肉にしたがう者は肉の事をおもい、靈にしたがう者は靈の事をおもう。<sup>6</sup>肉の念は死なり。靈の念は生命なり、平安なり。」（ロマ8・1～6）

生まれつきの我々の思いは死だという。御靈におけるところの思いは生命であり平安である。これは「平和」でなくて「平安」です。平和というのは人間のお互いの関係のこと。平安というのは神さまとの関係が立つてることが平安です。平安のない所には本当の平和はない。そんなことは普通の人は知らん。

十字架によつて贖われて、そして聖靈が來ている、この十字架・聖靈の世界を本当に身につけていると、これが本当の平安なんです。運命・環境がどうなろうと、そんなものに決して動かされない。打ち勝つ。絶対恩寵の力の世界、光の世界だからね。

ローマ書8章にちゃんと書いてある。

「<sup>8</sup>また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。

「肉に居る」ということは、生まれつきの我々は神さまを喜ばすことができないということ。

<sup>9</sup>然れど神の御靈なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで靈に居る。

キリストの御靈なき者はキリストに属する者にあらず。<sup>10</sup>若しキリスト汝らに在<sup>いま</sup>さば<sup>からだ</sup>体は罪によりて死にたる者なれど靈は義によりて生命に在る。<sup>11</sup>

若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御靈なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿り



たもう御靈によりて汝らの死ぬべき体からだをも活かし給わん。」（ローマ8・8～11）

とパウロははつきり言つてゐる。私たちは死を知らない。「死」という言葉は要らない。

私は死という言葉は嫌いだ。死はない。私はもう90歳だから、人生の最後のところに来たわけだ。いつ逝くか知らんけれども、その時は、

「小池先生は死んだ」

なんて言つては困る。

「あちらの方へ往つて生きました。往生しました」

と言つてくれなければ。他界に往つて、別な世界に往つて、往生している。

死に完全に打ち勝つていることは、パウロは別のところでも言つてゐる。ローマ書は凄いから、時々読んでください。

「ローマ書は新約聖書のダイヤモンドである」

と内村先生が言つていた。

## ●世の光

聖書で、「世」というときは罪の世からだということです。世からだというのは暗く、本当の光をもつていらない。

## 「世の光なり」

とは

## 「闇の光なり」

ということです。我々は太陽で光というものを知ったわけだ。地球は太陽に照らされ、太陽の光熱を受けて、地球上のものはみな生かされている。太陽の光熱のお陰で生かされている。いろいろなものが見えるのは、太陽の光のお陰です。地球上では太陽は絶対的な存在です。太陽がどこかへ行つてしまつたらお終いなんだ。

だから、「太陽神」というのがある。太陽を拝む。太陽を拝んだつて悪くはない。とにかく、すべてがただ当たり前のような顔をしているのが一番いかん、感謝感激の気持がなかつたら。ところが、当たり前のような顔をしているのが大方だね。だから、聖書にぶつかつた人はみな非常に深い使命をもつていますから、そのおつもりで。

讃美歌87Bに、

「恵みの光はわが往き悩む  
闇路を照らせり、神は愛なり。

我らも愛せん、愛なる神を。

うき雲おおえどみ顔の笑みは  
さやかに照りいづ、神は愛なり。

我らも愛せん、愛なる神を。



憂いの時にも望みを与え、  
慰め給えり、神は愛なり。  
我らも愛せん、愛なる神を。

ものみな移れど恵みの光、  
とわにぞ輝く、神は愛なり。

我らも愛せん、愛なる神を、「

とある。また、詩篇27篇に、

「<sup>1</sup>エホバはわが光、わが救<sup>すくい</sup>なり。われ誰をかおそれん。エホバはわが生命の  
ちからなり。わが懼<sup>おそ</sup>るべきものはたれぞや。<sup>2</sup>われの敵われの仇<sup>あだ</sup>なるあしきも  
の襲<sup>つま</sup>いきたりてわが肉をくらわんとせしが蹶<sup>たお</sup>きかつ仆れたり。」（詩篇27・1）

(2)

これは素晴らしい言葉だね。

「エホバはわが光、わが救なり……」

とは、我々にとつては、

「キリストはわが光、わが救なり。われ誰をかおそれん。キリストはわが生命のち  
からなり」

ということです。

### ●無者キリスト

「キリスト教」とよく言う。私は「教」の字が嫌いだ。キリスト道です。教えではない。

「私は何も言えない。神さまが言わせているだけだ。私は為<sup>す</sup>ることもできない。

ただ、神さまの力によっている」

とキリストは言っている。だから、私はキリストのことを「無者」と言っている。何も無いひとです。キリストは無者、

「無者キリスト」

です。私もまた何ものでもない。キリストが一切である。

「キリストの無者」

である。我々はそういうことです。無者というのはそういう意味です。

聖書は大変な本です。聖書が本当は一番面白い。聖書が面白くならなければウソですよ、

「聖書は難しい」

なんて言つているうちは、ちょっと難しくはない。自分にピシャツとくる句を中心にして、段々展開していく。頭で分かつたらダメです。

「分かる」

という言葉はダメだ、



「食べました、飲みました、受けとりました」

ということでなければ、「分かる」という言葉は、頭でもつて判断するような言葉だからよ  
くない。

「何も分かりません。ただ食べました。受けとりました。飲みました。力を受けま  
した」

というわけです。

あなた方は大体、口語訳の聖書を読んでいらつしやるのかね、私はいつでも文語訳なん  
だけれども。口語訳では、キリストが

「あなた方は」

なんて言っている。

「お前たち」

でいいんだよ、キリストは権威をもつて語つてらつしやるんだから。「あなた方は」なんて  
いう訳はおかしい。なぜ「お前たちは」と書かないのだろうか。「あなた方」なんて言われ  
たら、くすぐつくなってしまう。だから、文語の

「汝」<sup>なんじ</sup>

という言葉はいい。とにかく聖書は火花が散っていますから。

### ●何処より来り何処に往く

ヨハネ伝8章にもどります。

<sup>12</sup>斯<sup>かく</sup>てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は

暗き中を歩まず、生命の光を得べし』

「生命」は「ブシヘー」でなくて「ゾーエー」「永遠の生命」です。

「滅びない生命の光を得べし」

ということです。

<sup>13</sup>パリサイ人ら<sup>びと</sup>言う『なんじは己<sup>おのれ</sup>につきて証<sup>あかし</sup>す、なんじの証<sup>まこと</sup>は真ならず』

普通の判断からいと、自己弁護みたいなのがへタすると証で、自己弁護は自己が中心にな  
なつてゐるから、パリサイ人の言うことは普通の意味では本当なんです。けれども、キリ  
ストは自己が無い、私の無い無私のひとですから、キリストは自分のことを証しても、そ  
れは真理でないのではなくて、それは本当に真理なんです、本ものなんです。

<sup>14</sup>イエス答えて言い給う『われ自ら己<sup>おのれ</sup>につきて証すとも我が証は真なり、我  
は何処より来り何処に往くを知る故なり。汝らは我が何処より來り、何処に  
往くを知らず。

キリストは神さまの所からやつて来て、また神さまの所へ帰つていくんだと。

<sup>15</sup>なんじらは肉によりて審<sup>さば</sup>く、我は誰をも審かず。



汝らは人のことを相対的な現実でもつて審いでいるからダメだと。

一我は誰をも審かず」

「人間は自分でもつて自分が審かれるようなことをするから審く必要がない」ということ。

16 されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し

給いし者と偕なるに因る。

「神さまと一緒だから自分の証は本ものだ、いわゆる自己でもつて語っているので  
はないんだ」と。

これは申合説11章1節に書いてある。

17 また汝らの律法に、二人の証は真なりと録されたり。まこといとしる

だから、二人なんだ。 紹う』

だから、二人なんだ。

<sup>9</sup> 父なる神と一人でやつて いるから 本当だ。神さまの言葉によつてやつて いるのだ  
から、勝手に自分でやつて いるのでは ないんだ」と。

は我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』  
20 イエス宮の内にて教えし時これら之事を賽錢函さいせんぱこの傍らにて語り給いしが、  
彼の時 いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。

キリストは神さまのことを「父」と言って、自分は「子」なんです。この「父子」といふことは——「では、母は何か」なんて、そんなことを言つてはいるのではない。もし、強いて言うならば「母」とは聖靈のことです——「父と子」というのは、非常に人格的な思ひがそこにある。人格関係です。肉体的な父と子ではない。これはもちろん靈的な意味です。まあ、普通の人には「靈」なんて言つても、分からぬわけだね。聖書で「靈的」というときは「聖靈」ですから。神の靈、キリストの靈、聖靈、これは三位一体であるというのはそのことです。人格と言つても、「靈格」と言つてもいい。靈格という言葉はないけれども、そうなんです。靈的人格、靈におけるところの人格です。いわゆる人格ではない。もつと次元が高<sup>い</sup>。

光の子

『レ・ミゼラブル』に出てくるあの司教さんみたいなものです。『レ・ミゼラブル』というのは大変な小説だ、世界の第一級品だ。読むと涙がでる。とにかく、皆さん、くだらないものを読まないで、第一級品を読みなさい。第一級のものを熟読した方がよほどいい。現



代の人たちは古典的なものから遠ざかって、非常に薄平くなってしまった。第一級の文学を読まなくてはいかん。

チャップリンの映画『独裁者』の中に出てくる台詞<sup>せりふ</sup>に6分間演説というのがある。

「人生とは自由で美しくあってほしいものなのに、私たちはそうした生き方をなくしてしまった。醜い欲望が人々の魂を毒し、世界に憎悪のバリケードを築き、私たちを悲惨と流血に追い立てた。私たちはスピードを発達させたが、私たち自身を閉じ込めてしまった。豊富に物を供給する機械は私たちに物足りなさを反対に植えつけた。私たちの得た知識は私たちをシニカル（皮肉）にした。私たちの賢さは私たちを気難しく冷淡にした。私たちは余りに多くを考えすぎ、感じ取ることが余りにも少なくなっている。機械よりも私たちに必要なのは人間性、ヒューマニティーなのだ。賢さよりも必要なのは、親しさと優しさなのだ……」

これはなかなかいい台詞です。チャップリンはヒットラーと同じ年月に生まれている。不思議なものだ。

私たちは「エン・クリスト」「キリストの中」に入ると、キリストの光が自分の中に入つてきて、そして、光ならざるを得なくなる。太陽の光とまた違つた光だ。靈眼、心眼でものを見ていく。

### 「眼光紙背に徹する」

という。作者以上の世界をその作者の文字の奥に読んでしまう。

漱石さんのものを読んでも、それは素晴らしいけれども、しかし、足りない。漱石の奥を読んでいく。日本の作家はそういうつたもの凄い靈的な世界をもたないから、日本の文学ではもの足りない。とにかく、世界的な第一級品をお読みなさい。そしたら、楽しくてしようがない。『レ・ミゼラブル』、『ファウスト』、『神曲』。トルストイの『復活』もいい、特に終りの方のカチューシャのところは。

### 「カチューシャかわいや別れのつらさ」

という歌は昔、帝劇でやつた劇中の歌として松井須磨子（1886～1919）が歌つて、日本全国でおおはやりになつた。

世の光、闇の世の光ということ。我々はエン・クリストで光の人にされている。この光はいかなるものも消すことができない光です。我々は「光の子」なんだ。もう、平伏してありがたいだけです。行き詰まりを知らんということになる。

## ●夢の世界

太陽の光が水滴に当たると虹になる。光は色をもたない。無色の光なんです。無色の光は無限の中身をもつていて。人の眼には七色に見える。虹がそうだ。虹がよく顯している。虹は二重に出る。「虹霓<sup>こうげい</sup>」という。中国人は「虹」を雄の竜、「霓<sup>げい</sup>」を雌の竜というように見



る。七色の光が一つになつたり、一つの光がまた七色になつたりする。そういうことを歌つてゐるのがシラードの詩——「散歩」という詩だつたかな——の中にもある。

人が歌つてゐる時に、それを聞きながらその世界に、そういう心境に入らなければダメですよ。歌い方がうまいかまずいか、ということではない。その世界に入る。それが本当の聞き方というものです。歌というものは素晴らしい。詩篇はみな歌つたんだ。あれは詩篇ではなくて歌篇なんだ。ユダヤ人はあれをみな歌う。

ある神秘家が

「闇の中ほどかえつて本当に光が見える」

と言つた。

「牢屋に入れられても、ちょっと暗くない。自分は本当の光を見ています」

と。「光を見る」というのは、光によつて光を見るんです。こつちの目玉に光があるわけではない。

祈りというのは、外側から祈つてはダメですよ、祈入、祈り入らなくては。祈りながらその世界に入らなくては。だから、

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とあるでしょ。聞かれている現実として祈つていかないと。

「祈つたけれども、果たして聞かれるだろうか」

なんて、そんなことを思つてゐる祈りはダメなんだ。私心のない祈りは必ず聞かれる。今現象していないうきょうに見えるけれども、必ずいつかは現象する。根源現象はその祈りの瞬間にきている。

「…であろう」

の世界ではなくて、

「…である」

といふ靈的な現在といふものをちゃんと持つてないといかん。

「キリストに在る」「エン・クリスト」

といふことは素晴らしい現実です。エン・クリストだつたら、もう何がどうなろうと、一向差し支えない。エン・クリストの人は非常に創造的になる。ものを造り出していく。

本当の無の世界は、無から創造するんです。普通の人は無といふことが分かつてないね。これは一番素晴らしい根底の現実なんです。そうすると、無限無量が出て来る。無は無限無量に展開する。

これは冥想していると凄いことになるよ。私は夢の世界でよくそういうことがある。夢が夢でない。夢の世界が靈的な現の世界になつてしまふ。靈的現実の世界になる。それは楽しい。そういう不思議な夢を私は時々見る。醒めると、逆にがつかりしてしまふ。なぜ、眼が醒めたかと。

